

74. カトリック改革期ローマ教会圏における聖母被昇天図像の変容と再創出について

京都産業大学 文化学部 准教授 桑原 夏子

概要

カトリック改革期に刷新された聖母被昇天図像の成立を探ることが本研究の目的であった。そのための手段として、ヨハネス・モラヌスらの美術注釈を精読するとともに、イエズス会のイグナティウス・デ・ロヨラ監修の『福音書画伝』の聖母被昇天図像とそこに付されたテキストの内容を分析し、テキストの源泉を探った。また刷新された聖母被昇天図像が、ヨーロッパにおいてどの程度の範囲で普及したのかを現地調査によって把握するよう努めた。

調査の結果、①『福音書画伝』の聖母晩年伝は、イエズス会士たちが複数の偽書（聖書外典）を部分的に抽出して物語を成形したものであること、②『福音書画伝』の聖母晩年伝のうち、聖母被昇天図像にかんしてはフランドルの画家ルーベンスを中心に好んで用いられたこと、③カトリック改革後の聖母被昇天図像は「無原罪の御宿り」と類似した特徴を示すものが増加したこと、この3つを特に重要な知見として報告する。

背景および目的

カトリック教会は16世紀初頭に起こった宗教改革を機に、聖書に基づく神の理解を訴えるプロテスタントに対抗するため、視覚イメージによって信者の信仰心を高める戦略をとった。彼らは特に、プロテスタントが否定した聖母崇敬を積極的に肯定し、そのためカトリック改革期には新たな聖母図像が量産された。こうした聖母図像のうち、「聖母被昇天」図像は中世以降複数の図像によって絵画化されていたが、カトリック改革期にはヨハネス・モラヌスらによる美術注釈書に従って、統一的な図像が作られた。しかし、当該美術注釈書の示す図像の規定がどのようなプロセスを経て決定されたのかについては未だ明らかになっていない。

モラヌスらの試みをもとに、イエズス会のイグナティウス・デ・ロヨラが監修した挿絵入りの聖書図解『福音書画伝』が作られ、それはヨーロッパ内で瞑想訓練のために用いられるとともに、布教の際に絵画を通して聖書理解を促す手段としても用いられた。つまり刷新された聖母被昇天図像は、聖母被昇天についてのカトリックの観念を具体化したものであると同時に、ヨーロッパ内外に普及がはかられた点でも重要なものと言える。キリスト教が世界宗教の座を獲得するにあたり、刷新された聖母被昇天図像の理解が求められていること、これが本研究の大きな背景であった。

方法

1. モラヌスらの美術注釈書の規定する「聖母被昇天図像」の特徴の把握

カトリック改革に賛同した神学者のなかで、聖母崇敬を盛り立てるために「適切な絵画図像」について講釈した著作をピックアップし、彼らが示す「聖母被昇天」図像の特徴について把握した。

2. モラヌスらの図像に基づくカトリック改革期(16—17世紀)の作例群のデータ収集

16 世紀から 17 世紀にかけてカトリック絵画が量産されたイタリア、ベルギー、フランスに滞在し、この時代の聖母被昇天主題の作品を網羅的に目を通し、『福音書画伝』の聖母被昇天図像を下敷きにした被昇天図像を確認した。

3. モラヌスらの規定と偽書の内容の対応関係の調査

モラヌスらの規定に基づいて制作された『福音書画伝』には、挿絵とともに注釈が付けられている。注釈の内容を確認し、聖母被昇天を語った注釈が過去の偽書（聖書外典）のいずれを典拠とするものなのかを探った。

4. モラヌスらの「聖母被昇天図像」の元となった偽書に対応する中世・ルネサンス期作例との比較

刷新された聖母被昇天図像の典拠となった偽書（聖書外典）の内容と対応する中世・ルネサンス期の絵画作品と、同じ偽書をもとにしつつも 16 世紀に刷新された絵画作品とを比較し、違いがどこに見られるのかを観察した。

結果および考察

得られた知見①

モラヌスらの美術注釈の精読からは、複数の偽書の内容が部分的に抜き出される形で新しい図像についての注釈がなされていることがわかった。しかしモラヌス、パレオッティ、ジリオ・ダ・ファブリアーノの聖母被昇天図像にかんする注釈の記述はそれぞれ一致しない箇所もあった（聖母の年齢についての記述など）。したがって彼ら神学者のなかでも図像の規定には意見の差異があり、そうした差異は彼らの主張を受け入れる画家や作品注文主によって作品に反映されたと推定できよう。

得られた知見②

モラヌスらの注釈よりもより広範囲に影響を与えたのが『福音書画伝』であったが、そこに付された聖母被昇天の注釈は、モラヌス、パレオッティ、ジリオ・ダ・ファブリアーノのいずれかに極端に偏って考案されたものではないことがわかった。『福音書画伝』の聖母晩年伝は「聖母のお眠り」「聖母の埋葬」「聖母のよみがえり」「聖母被昇天と戴冠」と 4 場面から構成されているが、「被昇天」以外の主題の注釈も分析したところ、いずれも複数の偽書の内容が部分的に抜き出され、それを組み合わせる形で物語が作られていることがわかった。

得られた知見③

『福音書画伝』の聖母被昇天図像を下敷きにした絵画作品はフランドルの画家ルーベンスによって頻繁に描かれていることがわかった。ルーベンスが拠を構えたアントワープには、『福音書画伝』の印刷出版を担当したブラント印刷所があり、アントワープがこの図像の普及の磁場となった可能性を見出すにいたった。

得られた知見④

16 世紀、17 世紀に量産された聖母被昇天図像には聖母が「月を踏む」ものが散見され、『福音書画伝』の「聖母のよみがえり」にも同様の表現が見られる。伝統的に「月を踏む聖母」は「無原罪の御宿り（聖母が原罪なくして母の胎内に宿ったこと）」を示す図像だが、この時期において「聖母被昇天」と「無原罪の御宿り」が融合されるケースが多々見られた。その融合の理由は明らかにできなかったが、今後の課題の一つとして追究したい。

今後の課題

ヨーロッパの広域を対象とし、なおかつ時間のかかる研究調査だったこともあり、研究期間終了時までに得られた知見を口頭発表あるいは論文として発表することができなかった。しかし今回得られた成果のなかでも、知見②～知見④は今後の聖母図像研究を加速させるものであると考えている。

知見②は、イエズス会による聖母伝理解の実態を明らかにする重要な鍵となると考えられる。

知見③で言及したプランタン印刷所は、当時の最新の知識が結集し、かつそれが世界中に伝播する最前線の間所であった。プランタン印刷所を取り巻く知的サークルが聖母被昇天図像の普及にどのように関与したかは今後考察を深めていきたい。

知見④は、無原罪の御宿りという、やはりカトリック改革期後に爆発的に普及した図像と、聖母被昇天図像との対応関係の分析に進展する課題である。

2027年には中央公論新社から『聖母マリア信仰の謎-美術史で読み解く人間讃歌』（中公選書）を刊行予定だが、その一部は今回の研究調査成果を生かして執筆する予定である。

(完)